

取材

事例1 グループホーム谷津苑 (有限会社ウェルフェア・千葉県)

保育所を開設し、子どもを抱える女性の要望に応える

千 葉県習志野市にある有限会社ウェルフェア(田邊恒一代表)は、グループホーム1ユニット2カ所(谷津苑、秋津)、認知症デイサービスと居宅介護支援事業所をそれぞれ1カ所運営している。職員数は正規・非正規合めて40人弱で、うち女性は約30人。20~60代の幅広い職員が働いている。

介護業界の深刻な人材不足が叫ばれる中、同社も例にもれず職員の確保に苦戦していた。田邊代表は7年ほど前、「介護に興味があるけれども、子どもがいるから働けない」という求職者の声を聞き、この問題を解決することが人材確保のカギとなると考えた。保育士の資格を持っている奥さんの後押しもあり、平成20年にグループホーム谷津苑の空きスペースを改修・活用して従業員保育をスタート。1日最大3人まで職員の子どもの預かった。その後、待機児童を抱える地域の女性から「周りに認可外保育所がないので、うちの子も預かってほしい」という声が複数寄せられた。平成22年に再度改修してスペースを拡大、市の認証を得て、認可外保育施設「保育ルーム ロゼッタ」へと発展させた。



田邊恒一代表

「地域密着型サービスであるグループホームは、地域との関わりが大切。保育事業であっても、地域ニーズがあれば応えるべき」と、田邊代表は説明する。

保育ルームは、定員12人。生後2カ月から就学前までの子どもを預かる。料金は通常1時間当たり500円だが、同社の職員は会社負担分200円を差し引いた300円で利用できる。保育スタッフは計7人、1日3人体制で運営している。年末年始以外は営業し、開所時間は8時~18時、延長保育を含めると7時~20時までとなっている。

保育ルームの開設により、子どもを抱えながらも働きたいという女性たちのニーズに対応可能に。求人媒体などで募集をすると、「託児所があるならここで働きたい」という問い合わせが増加。子育てで行き詰った母親が、同グループホームで働くことで社会との関わりが生まれ、自分と子どもとの距離感がとれるようになり自分を取り戻すことができたケースもあるそうだ。

子どもたちにも利用者と散歩に出かけたり、グループホーム内で一緒にぬり絵をするなど、有意義な時間を過ごすことができる。もちろん、子どもたちの言動で利用者に行動・心理症状(BPSD)が生じないように気を配ったり、入居前に本人や家族に保育所を併設していることを説明するなど、配慮は欠かせない。

現在、グループホームとデイサービスの職員がそれぞれ2人、計4人が子どもを預けている。グループホームの計画作成担当者の山口響子さん(30代前半)は3児の母親。三男の蓮斗くん(1歳半)を生後2カ月の時から預けながら働いている。1日9時間、月に20日程度活用している。「そばに子どもがいるので安心して働けます。9月に4人目の子どもが生まれますが、保育所に入れなくてもここに預けることができるので、仕事を辞めずに働き続けられてありがたいですね」と喜ぶ。



山口響子さん

デイサービスで働く大橋友美さん(20代後半)は、1歳10カ月の結羽ちゃんを預けている。かつて同グループホームに勤務し、結婚・妊娠を機に退職、平成27年4月に再就職した。「退職時に田邊代表から『落ち着いたら戻ってきて』と声をかけられたことが心に残っていました」と笑顔を見せる。



大橋友美さん

「課題は夜勤職員の確保」と、田邊代表は話す。保育所は夜勤帯をカバーすることができないため、子どもを抱える女性は夜勤を担当することが難しい。夜勤専門スタッフの募集や夜勤の勤務時間の短縮など試行錯誤をしているが、なかなか決定打は生まれない。より効果的な方法を模索しているところだ。



保育ルームの様子